保育者の生きがい

――子どもとのふれあいのなかで得られるもの――

吉田祥子

「あなたは、今の仕事に生きがいを感じていますか？」と問われれば、私は即座に「ハイ」と答えるであろう。しかし毎日本当に楽しく夢中で過ごしてはいるものの「保育者の生きがいは？」とあらためて問われてみると、言葉では何ともいい表わすことのできないものを感ずる。言葉で表現するとあまりにも平凡で浅薄なものになってしまいそうな気がするのである。

高校生のころに、自分の将来について真剣に考えたことがあるが、その時に、仕事をするなら誰にでも簡単にできることでなく、何かそこに「生きがい」を見いだせるものを選びたい、自分にしかできない、自分を生かせる道を選びたい……という希望をもったことを覚えている。それからいろいろな曲折はあったにせよ、結果として、私は保育者というものに「生きがい」を見いだして、今日まで過ごしてきたわけである。

幼児教育の世界は、考えれば考えるほどわからなくなり、足を踏み入れれば踏み入れるほどむずかしさを痛感させられる世界である。それだけに深いものがあって、真なるものを求めて必死になってしても満足いくものではないが、その反面、何も考えず経験と惰性でしても、現実にはことが済んでいくのが保育の世界である。

その意味で、保育者にはこの二通りの生き方があると私は考える。後者の場合、困難も少ないかわり「生きがい」を感じるほどの感激も少ないのではないだろうか。私は自分の力

には余るものを感じつつも前者を選び、満足がいかないまでも、真剣なぶつかり合いの中に「生きがい」を見いだしている。同じ仕事をしていても「生きがい」を感じる人もいるし、感じない人もいる。そう考えていくと「生きがい」というものは、既成のものとして〝在るもの〟でなく、保育者自身が作り出していくものであるともいえる。

私は、四月五月ごろの新入園児で湧き立っているころの幼稚園が好きである。西も東もわからない新しい子どもたちにあれこれ働きかけて、その子どもに一番適した方法を見つけ出し、混沌としたものを方向づけて何とか自分の範疇に入れていく過程。無から有を生み出していくような、幼稚園の中で一番大変な時期であるが、ある意味では一番やりがいのある時期ともいえるのではないだろうか。

AならばB、CならばDというように決まった公式も法則もないだけに、ひとつひとつその方法を考え、最も良いものを作り出していく必要がある、それらを全身であみだしていくことが、保育者に与えられた仕事である。その結果はいろいろで〝あの子がここまで成長した〟〝一言も話せなかった子どもがこんなに話せるようになった〟……というように、子どもたちの成長した様子を見て「生きがい」を感じる人もいるであろう。

もちろん、自分が真剣に取り組んだことが効を奏すれば喜びも大きい。しかし、私は、それだけではないように思う。子どもたちと過ごすその瞬間瞬間が私にとっては大切であり、成長した結果は副産物である。私はむしろ日々刻々と変化していく中で、子どもたちといっしょに過ごす毎日毎日が本当に楽しいものであるというところに「生きがい」を見いだす。子どもたちの世界は常に動いている。ひたすらに現在を生きる世界であるともいえる。その中で子どもたちは毎日真剣に生活している。この子どもたちに我々がどうこたえていくかは、大きな問題だと思う。その保育者の態度が、気構えが、子どもたちの人格を作っていくといっても過言ではないように思う。

保育というのは、保育者と子どもたちとの人格の触れ合いではないだろうか。真剣に生きていく子どもと保育者との出会い、触れ合いの中で、お互いが教えられ学び合う場であると私は考える。「教育はお互いである」という倉橋惣三先生の言葉があるが、まさにその通りであると思う。お互いが触れ合いの中で成長していけることは「生きがい」に通じる面をもっていると思う。

それぞれの子どもたちは個性をもっている。一人として同じ子どもはいない。保育者にしても然りである。子どもたち

ひとりひとりの個性を生かしながら、また保育者の個性もそこに出しながら、お互いに全力でぶつかり合う中で、人格形成に必要なものを摂取していく。相手が生きて変化していく子どもであるだけに、二度と同じ場面はくり返されない。同じようでいて少しずつ違う。その意味でより多くの創造性を必要とする仕事である。ある時は、ほんの小さな可能性の芽を見いだし、それを伸ばすことに真剣になることもある。子どもたちの限りない可能性に満ちた芽を摘み取ることなく、暖かくはぐくむことができるよう、子どもを見る目を養い、心を養うよう、また技術をみがくよう努力したいと思う。このように、保育者が常に学び、成長していなければできない仕事であると思う。人間は困難なものに挑戦する時に「生きがい」を見いだすものである。その意味で保育者は、やり方次第で十分「生きがい」を感じられるのではないだろうか。

幼児教育と一言でいっても、ひとりひとり教育観、教育方針も違い、その中でお互いに主張しながらしていくことは、現実にはむずかしいことが多い。女性ばかりの職場であるだけに、人間関係も複雑でむずかしい。理想と現実の違いに泣かされる日々もある。そんなことに思い悩む時、ある時はやめてしまおうかと考えることもある。しかし、保育者が子どもと触れ合い、子どもたちの中にとけこめた時の、あの何ともいえぬ醍醐味を思う時、その決心も鈍ってしまい、きょうまで続けてきたわけである。これは保育者にしかわからない味であり、このことを思う時、幼児教育は一生続けても悔いのない仕事だとも思う。

「保育者の生きがい」について、思いつくままにしるしてみたが、現在私がもっている思いを一言で表現するなら「子どもたちとの毎日の生活そのものが、すなわち私の生きがいである」というのが、一番近い答であるといえるように思う。現場に入って七年目を迎えたものの、この先どうなっていくか自分でもわからない。しかし、可能な限り、事情の許す限り、この仕事に取り組み、与えられた場を生かしながら、真の幼児教育を追求し、実践していきたいものと思っている。

（大和郷幼稚園）